

---

# 魔法使い = レジナス

赤屋根

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法使いⅡレジナス

### 【Nコード】

N7822P

### 【作者名】

赤屋根

### 【あらすじ】

順調な高校生活を送る予定だった竹島順は、魔法使いⅡレジナスを名乗る少女と出会った事により、波乱万丈な毎日を送ることになる。少女、ミサとの偶然出会った事で、レジナスの世界とどんどん関わりあう羽目に。

## 奇妙な一日

俺はその日、死と隣り合わせにいた。

いつもと同じように一日を過ごし、いつもと同じ帰り道で、空にぼんやりと浮かんだ朧月。

意味のない考え事をしながら聞いた低いうなり声は、始めは空耳か何かだと思った。

しかし違った。

薄暗い中でもはつきりと目立つ黄色と黒の縞。

そこにいたのは巨大な虎だった。

なぜそこに豹がいるのか、その疑問が起こる前に俺の頭に浮かんだのは、

死にたくないという思いだった。

十メートルと離れていないその虎から、全速力で逃げだす俺。悲鳴はあげていたかもしれないし、いなかったかもしれない。

高校に入ると同時に一人暮らしをしようと借りたアパートは、家賃のみをみて選んだ為、

人通りが少ない、街灯すらない場所にぽつんとたっている。

今はそれがとても恨めしかった。走っても走っても人に遭遇しない。

走りながら後ろを確認すると、虎はしっかりと俺の事を追いかけてきていた。

金色の目が怪しげな光を放っている。

それにしてもなんて大さだ、頭の高さは俺の肩くらいあるし、頭の大きさは小さいタイヤ位ありそうだ。

破裂しそうな心臓と棒になりそうな足を無視して、俺はさらにスピ

ードをあげる。

アパートまで来ると、階段を三段飛ばしで駆け上がった。ラッキーな事に、部屋のドアが開いている。

部屋に飛びこみ、ドアを閉める前に、一瞬背後を確認すると…

虎は消えていた。小さな薄汚れた野良猫が足元に擦り寄ってきているが、丸太のような足をした、ナイフのような牙をもったさっきの虎は跡形もなく消えている。

呆然としたまま、俺は必死で息を整えようとした。下を見下ろすが、虎はやはりいない。とりあえず安心すると同時に、冷静さを取り戻しつつある俺は、部屋の中を見て、また呆然とした。

そこにいたのは、まるでそこが自分の部屋であるかのようにくつろいでいる、クラスメイトの里李<sup>サトリ</sup>みさだった。

クラスメイトといっても、一回も口をきいた事はない。高校が始まってから一週間、里李みさはちよつとした話題の的だった。背こそ低かったが、くりつとした大きな目は青みをおびたグレーで、彫りの深い顔立ちは日本人離れしていたし、真っ黒い短めの髪はつやつやと輝いていた。歩く姿は快活そうで、好奇心旺盛な目をしていたが、彼女は友達を作る気がまったくないようで、だれとも話さなかった。

しかも一週間をすぎたところからまったく学校に来なくなり、学校が始まってから一ヶ月がたった今では、里李みさは話題にあまり上がらなくなっていた。

「おかえりつ。 たけしまじゅん 竹島順」

よっという風に手をあげて、まるで何年もの知り合いであるかのよ

うに話かけてくる里李みさにむかって、内心毒づいた。

「なんでここにいるんだよ」

眼鏡をとって顔の汗をぬぐいながら、問い詰めようと里李みさに俺は近づいていく。

「ダイガーちゃん、こわかったあー？」

立ち上がり、上目使いでりこりとしながらそう言われ、俺はびくつとした。

「そうだよ、動物園から逃げ出してきたのかしらねえけど、虎が追いかけて来て…警察に連絡しないと」

そういつて鞆から携帯電話を取り出そうとする俺を里李みさは制止する。そして何故か部屋の外に出て、汚い子猫を抱き上げた。

「その心配はないよ。タイガーちゃんの正体はこの子だもん」

俺は里李みさの勘違いっぷりに啞然とする。しかし今は里李みさにかかわっている場合じゃない。

「わかった。わかったからとりあえず帰ってくれ」

そう言つて強引にドアを閉めようとすると、彼女は続けた。

「みさは勘違いしてないし、ほんとの事をいつてるよ」

俺が対応に困っていると、彼女は更に俺を困らせる事を言う。

「みさが、この子に魔法をかけたの。虎に見えるように。」

にこりと笑う彼女に、俺は本当に困ってしまった。

## トランプ

「まあまあ部屋でゆっくり話そうよ」

そういうと里李みさは子猫を抱いたまま勝手に部屋に上がりこんでくる。

何をしていたのか知らないが、部屋のテーブルの上には、トランプがばらばらと散らばっている。

俺は胡散臭そうな視線を里李みさに投げかける事しかできなかった。里李みさは少し頭がいつちゃっているんだろつか。それともおかしいのは学校帰りに虎を見てしまう俺なのか。

「結果からゆくと、ジューンはおかしいって事が決定！」

俺の内心を見透かしてか、里李みさはのん気にそんな事をいう。

「ジューンが普通のヒトなら、この子はトラちゃんに見えるはず。ジューンがおかしいのは、この子が、真実の姿の子猫に見えるってところ」

俺は里李の言っている事の意味がまったく理解できない。

「ミサの変化術をジューンは見破っちゃった。つまり、ジューンには、ミサと同等レベルの魔力があるってコトなの」

それまで、にこにこしていた里李は、ここでふと真顔になり、ぱーとつたっている俺に近づいてくる。

「レジナスは知ってるよね？」

首を傾けたまま、里李は俺の目を探るように覗き込んでくる。俺は黙って首を横に振る。

「カルメランドへ行った事は？」

俺はまた首を横に振る。どちらの言葉にも聞き覚えはなく、何を言っているのか検討もつかない。

しかしそんな俺の反応を見て、里李みさは驚いたようだ。目をくりくりさせて仰け反った。

そして椅子に勝手に座り込み、指を口にあてて、何かを考え込んで

いるようだ。

暫く二人の間に沈黙が流れた。その沈黙を先に破ったのは里李だった。

「もし仮に万が一、ジュンが嘘をついていないとしたら、レジナスを簡単には信じてくれないよね」

俺は嘘をついてはいないのだから、仮にとか万が一とか言わないで欲しい。

「じゃあとっておきの手品を見せてあげる。そのトランプを持ってミサについてきて」

そう言つて、里李は勝手に外に飛び出していった。俺はどうすべきか迷ったが、しぶしぶ靴を履いて外に出た。

「はやくはやく」

そう言いながら、里李は俺の3mほど前を鼻歌まじりに歩いてゆく。どこに行くのかと思ったら、コンビニに入っていた。何をするのかと不安になりながら、俺も後に続く。

里李は買い物カゴに、ぼんぼんと商品を入れていく。商品を見ると、カレー味とか唐辛子系とか辛いものばかりだ。

カゴが大体一杯になると、レジに向かった。

「これください！」

レジの店員がテンポよく商品をスキャンしていく。

「三万一千円になります」

そして、里李がポケットから何食わぬ顔で取り出したのは、さっきのトランプだった。

驚いて制止しようとする俺を里李が制止する。

店員は一瞬俺たちに視線を投げかけた後、いつも通りにレジからおつりを取り出し、里李に渡した。

「ありがとうございます。またのご来店をお待ちしています」

帰り道、俺は呆然としていた。これはどっきりか？誰が何の為に？

それとも？それとも何だっというのか。

しかし俺の頭に三週間前のある記憶がよみがえってきた。

「里李、学食で差し出してた紙切れって…」

「あれはお金」

里李は買ってきた商品を俺にほとんど持たせて、スナック菓子を食べながら何食わぬ顔で言った。

「あの時、気づいたの。ジュンはなんか変だなーって。なんでお金に見えてるはずなのに不思議そうな顔してるんだろーって」

里李が折り紙のような紙切れで、学食で買い物をするのを俺は数回目撃していた。

食券かなにかだと始めは思ったが、一ヶ月たってもそんなものはない事がわかり、少し不思議に思っていたのだった。



## 魔方陣

部屋に帰ると、里李は買ってきたものの中から、適当に何個かを取り出し、テーブルの上に広げる。

そして椅子にすわり、足を組んでテレビをつける。まるで自分の部屋にいるかのようなくつろぎようだ。

「テレビってすごいよねー、ミサあんまり人間界に来たことなかったから、びっくりしちゃう。」

俺はどう反応したらいいか分からず、黙っているしかなかった。

「ってゆうか、ミサ、ジュンにいっぱい質問があるんだけど」

そういうと、里李は急にテレビから向き直る。

「それは俺も同じだ」

「じゃあまずミサからの質問ね」

どうやら里李は俺からの質問はすべて後回しにするというような口調で続けた。

「お父さんとお母さんは、レジナス？あ。レジナスってゆうのは私たち魔法使いの事で、あなたたちが自分を人間ってうのと同じように、ミサ達は自分をレジナスってゆうの」

その質問に、俺は困ってしまった。俺は自分の親の顔を見た事が無い。記憶もない。物心がついた頃には施設にいたし、高校で一人暮らしをするまで、ずっと施設が家だったからだ。

「親は、知らない」

「あ、そう。」

俺は質問に対する答えとしては不十分じゃないかと思ったが、里李にはその答えで十分だったようだ。

「カルメランドの学校に来るように、中央省から通達はなかった？」

「カルメランドって？」

俺は聞きなれない単語に質問せずにはいらなかった。

「レジナスがいっぱいいる国の事。ほとんどのレジナスはそこで生

活してるの 人間はいなくて、結果で人間には見つからないようになってるの。町もあるし、学校もある。王様もいるよ」

俺は驚いた。本当にそんなところがあるのだろうか。とても信じられない。

「ジュンほどの魔力があつたら、中央省の役人に見つかつて、反強制的にカルメランドの学校に入学させられるんだけど、人間界で今まで生活してたなんて不思議」

不思議？ そうなのか？ 俺にとっては里李の言っている事のほうが百倍不思議だ。

「つぎ！ 今まで、レジナスと関わりあつたことはあつた？」

ある訳ないじゃないか。そんな気持ちから少し口調がきつくなってしまう。

「いいか、俺は里李のいう事を信じてる訳じゃないからな」

里李はぽかんとした顔に一瞬なつた後、明らかに怒っている表情になつた。

「そう！」

そして、椅子を立ち上がり、床の広く空いた部分に向かつて座り込み、こつちを振り向き言つた。

「頭のかたーいジュンに、仕方なく私の一番得意な魔法を見せてあげる」

里李はカーペットの一点を指差した。すると、里李の指先から一筋の青白い光が放たれる。

心なしか、辺りが暗くなつたように感じた。カーペットには、一メートル程の円の中に、複雑な模様をした魔法陣が描かれていく。

ジュンは里李の側へかけよつた。里李は真剣そのものだ。

魔方陣が完成したのか、カーペットに描かれた模様が不規則に青白く輝いている。

里李は自分の髪を一本引き抜いて、魔方陣の中央に置くと、俺の方

に向き直った。

「カルメランドを見せてあげる」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7822p/>

---

魔法使い = レジナス

2011年1月4日03時16分発行